

■教育者としてのMattieについて



マティ(Mattie; 註・マーサ・ハリスの愛称)は、経歴からしても、また彼女の心的傾向からしても、英文学の学徒であり教育者であります。その生来の気質からして、組織内での運営手腕が問われるといったことほど、彼女の性に合わない、無縁なものはまず無いといっている。だが、実にそれこそ【タヴィストック・クリニック】で彼女が徐々に遭遇していったことなのであります。そもそもMrs. ビック(E. Bick)が【タヴィ】を退職するという事態が生じ、それは実にマティにとっては青天の霹靂であったわけですが、そこでまだ

揺籃期にあったチャイルド・サイコセラピコースをマティが引き継ぐか、あるいはそれを自然消滅させてゆくに任せるか、二者択一を迫られたというわけなのです。

彼女はこの人生における危機的状況を、結局のところ徹底的な教育方法を企画立案することでどうにか乗り越えました。この際、彼女の夫であったローランド(Roland Harris)の励ましと援助は重要かつ不可欠でありました。それら主要なるアイデアの多くはローランドからヒントを得た模様です。当時彼はロンドンのかかなり規模の大きな中等学校(comprehensive school)の副校長をしておいでなわけですが、それは彼が後に教育省、さらにはBrunel大学で教鞭を執る以前のことになります。後にピオンの「経験から学ぶ」という概念において称揚されておりますけれども、ここに或るとも重要な一つの信念が例証されているといえましょう。つまり、誰かが或る専門的な職業人(professional worker)へと変容するに至る「学び」とは、大いに鼓舞してくれる誰か導き手なる者との密なる関係に根差していなければならないといったことです。その導き手なるものが、生きていようと死んでいようと、現存していようと著作の中にいようとどちらであっても…。此の点、ローランドという人自身は詩人でもあり学者でもあったわけですが、かなり刺戟的な導き手であったようです。彼が著わした多くの書物を目にしますと、学ぶ者たちがただそれらを読んで理解するというだけではなく、同時に自らの見識をも洞察し得るよう、彼ら個々人の能力が鼓舞されることが彼の本来の意図であったように窺われます。

さて、もう一つの課題となりますのが、この場合の「学び」が集団という状況のなかで行われるということでもあります。その雰囲気がいかなるものとなるのか、それをどう統御せんとするかは導く側の大事な責務となります。その為には、エリート意識を排除し、互いの競争心を避けること、そして個々の訓練生が各自懸命に己れの業務に携わりながら、終始一貫【タヴィ】に留まるか去るかを自己選別(self-selection)するということが何よりも肝要となりましょう。しかしながら、マティは教師としての経験を踏まえておりましたし、それは大戦中及び戦後、彼女がチャイルド・サイコセラピストそして精神分析家として訓練を受ける前のことですが、そうした教育現場での彼女の経験からして、ここで一つの重要な課題として、チャイルド・サイコセラピという職種を確立させためには、公的に認知されるべく必要

条件を充たす教育体制がぜひとも要請されるべきだという考えが、彼女の脳裏に過ぎたわけです。それは、いつか将来【タヴィ】の訓練コースを卒業した者たちがいずれ臨床機関及び教育機関に就職口を得ることを視野に入れてでありました。ここで再び、ローランドの広範囲にわたる行政面における知識がマティにとって大いに益することとなりました。それで当然ながら、彼女の思考面に整然とした秩序をもたらしたということだけではなく、彼女自身が率先して指示命令を下してゆくという態勢づくりにも大いに役立ったわけなのです。そうして徐々に彼女は、対外折衝の能力にすばらしく長けた人物になってゆくのですね。それも時には、彼女は‘政治家’だとも陰口を叩かれるほどに、であります。確かに、それなどは、例えば、チャイルド・サイコセラピイの訓練コースが絡んでいる場合やら、他には、後にハムズデット・クリニック、それにMargaet Lowenfelt が率いるグループと合同協議してチャイルド・サイコセラピスト協会（British Association of Child Psychotherapists）創設の運びとなるわけですが、そうした協会に利する事柄ならば、敢えて彼女は身を挺しても‘政治家’になったというわけなのです。

ここで改めて申しますと、マティは、ビオンの集団理論、そしてその後の彼のパーソナリティ構造論からも大なる示唆を受けながら、常にひとのこころの内側の構造に、そして同時に社会的な外骨格的バックボーンにも、どちらにも並行して目配りすることが彼女の思考面に最も主要なる意味付けをもたらしたといえましょう。かくして彼女なりに‘キリスト’と‘シーザー’の相違を十分にわきまえて使い分け、つまりマティは、「学びの作業グループ the learning work-group」の精神(ethos)を犠牲にすることなく、【タヴィ】の訓練コースが必要とする方法論をその都度実践的に捻出していったわけなのです。しかし、彼女にとってそれには多大なエネルギーを労しました。ローランドの支援があったればこそ、なんとか持ち堪えられたといえましょう。彼が1969年に大脳動脈瘤断裂で突然死したとき、彼女は急性の再生不能性貧血を患う事態に陥りました。が、早期の診断が功を奏し、コーチゾンの投薬治療によってなんとか死を免れたのです。それに彼女がなんとか生き延びられた理由のもう一つが夢でありました。その夢の中でローランドが彼女に、家族のためにも【タヴィ】のコースのためにもまだまだ生きてやらねばならぬことがあるのではないかと彼女を諭したというわけなのであります。

■ Mattie の人柄について

マティは、ちょっと癖のある話し方をする人でした。講演の最初の話し始めに、彼女はちょっと吃るといったふうに見えました。それは実際のところ、彼女の思考の複雑さと、目の前の聴衆から受け取る微細な反応を、どうにか心の内でうまく調停せんとする、ひどく込み入ったプロセスなのであります。そうした彼女の講演の録音テープを起こして活字にしてみますと、それは実に支離滅裂でひどいものなのです。ところがその場で聞いている聴衆にとってもたらされる効果というのが抜群なのでした。それはまるでヴァン・ダイクの絵画の絵筆の跡をちょっと身を引いたところで眺めると、グジャグジャした線の塊りが突如、絹のレースだったり真珠だつたりに見えて驚嘆するといった具合に、であります。彼女の声の質ですが、ほんの少しスコットランド風の柔らかなアクセントがありまして、それがため議論している真っ只中においてさえ彼女の激烈さをちょっとやわらげるかのような印象がございました。彼女の笑い声はとてもよく響き渡り、誰もそれがそれにつられて一緒に笑いたくなるような趣きがありました。ウィット(機知)をと

でも喜ぶ人ではありましたが、その一方、彼女自身はといえば機知に富んだ人とは言えませんし、無闇に人を喜ばそうとするタイプでもありません。しかし、彼女の陽気さはいつもその場の雰囲気となって、一緒に居る誰かしらが何か気のきいた言葉を語ってくれると大いに面白がり、また大いに感嘆することにやぶさかでなかったといえましょう。

彼女は、執筆の方はというと、そう易々とはいきませんでした。むしろ何度も何度も文章に推敲を重ねるタイプでありました。彼女の手書きは彼女の話し方とはまるで逆でして、遠くから見ると一見とても素敵に見えるのですが、でも実際には本人以外にはまるで判読不能なものでした。なぜなら彼女は書きながらペンを休めることを決してしないからなのです。それで、Mrs. ビックがいうところの‘looping (ループ状の鎖)’みたいになってしまうというわけです。さて、動物は彼女にとってさほど魅了されるものでも興味を抱くものでもなかったみたいです。幼少児期には農場に暮らしていたというのに…。しかしながら、美しい風景は彼女を狂喜させます。人工のものというのは概しておそらく彼女にとってはさほど感化されることのないもののようなものでした。文学は例外です。その分野においては、彼女の知識量、記憶力、理解力は実にめざましいものがあり、しばしば驚かされました。彼女はおびただしい量の本を読み漁っていましたから。しかしながら、精神分析関連の文献を読むことについていえば、熱心ということはいささかなく、ごくごく仕方なくといった具合でしかありませんでした。ピオンについて言えば、彼女は彼からスーパーヴィジョンを受けてましたし、Mrs. クライン亡き後、彼が彼女にとって随分とインスピレーションの源となっていたのは間違いありませんけれども、彼の著わした書物を読みながらどうも身が入らないといった風情がありました。

彼女は青年期以降、スポーツにはとても熱心でして(彼女の前歯が折れたというのは実はホッケーの試合中ということですが)、ところがどんなゲームの類いも彼女にとっては退屈に思われたようです。マティがカードやチェスに熱中している様子を想像することはできません。ローランドはどちらかというとチェスの熱狂的な愛好者であったわけですが。しかし、スコティッシュ・ダンスとなると、それはまた別の話です。彼女がリールを踊り始めると、一曲ではまったく不十分ということになります。興じてなかなか止められません。彼女は子どもたちには献身的でありました。しかしながら、子どもを溺愛するとか高飛車に物を言うとか、子どものプライバシーを侵すといった姿なぞ私はついぞ見たことがありません。彼女の温かな持ち味と慎みのある、遠慮がちな態度は一見矛盾しているかに見えますけれども、無理なぞしなくても自然なままでごく魅力的でしたし、耽溺することなしに精いっぱい相手に尽くすといった具合でした。彼女は、いつも自分が語ることは文字通り偽りなくそのままを意味したというふうに思われますけれども、しかし何もかも総て洗いざらい胸のうちを語るということは決してしませんでした。そして、もしも何かしら相手にとって耳障りなこと、ちょっと心を傷つけるようなことを言わねばならない場合には、彼女は、ちょうどエミリー・ディキンソンが言ってみたいにく真実を語るには語るとしても、それをちょっと遠回しに語る tell the truth, but tell it slant>といった趣きなのでありました。

【出典；<http://www.harris-meltzer-trust.org.uk/pdfs/MeltzeronHarris.pdf>】